

通常学級とことばの教室との連携

—— 場面緘黙状態を示す児童の支援を通して ——

足利市立山辺小学校 田 島 成 子
加 藤 美 代 子

1 はじめに

本校には、平成9年度より言語障害通級指導教室がおかれ、本校を含めて河南の小学校7校を担当している。平成13年10月1日現在47名の児童が通級し、二人の教師で担当している。児童の状態については、構音障害・言語発達遅滞・吃音・口蓋裂・緘黙等様々である。そのため、個々の状態に応じた個別指導計画を作成し、支援を行っている。個別指導計画を作成するにあたって、保護者からの情報、学級担任からの情報及び諸検査（主に構音検査・心理検査）の結果などから児童の実態を把握し、このような個々の児童の実態及び保護者の要望や願いを踏まえて、指導計画を作成し、支援指導している。ことばの教室において児童の支援を行う上で、やはり重要なのは保護者及び学級担任との連携である。特に場面緘黙の状態を示す児童については、緘黙の状態を起こしている場で（学級で）支援することが不可欠であると思われる。そのため、学級担任とことばの教室との密接な連携がより必要になってくる。

本論文は、学級において場面緘黙の状態を示す児童に対して、学級担任とことばの教室の担当者が連携し行った支援についてまとめたものである。

2 実践の手順

(1) 実態把握

- ア 保護者から家庭での様子について伺う。
- イ 学級担任から、クラスでの様子を聞く。
- ウ ことばの教室での様子
- エ 各種検査（WISC-Ⅲ・ITPA）

(2) 実態を踏まえ、個別指導計画を作成する。

- ・個別指導計画を作成するにあたって、長期的な目標・短期的な目標（2～3ヶ月をサイクルとしたもの）を設定する。

(3) 個別指導計画に沿って支援する。

- ア ことばの教室において、認知面の能力のアンバランスを踏まえた上での支援を行う。
- イ クラスにおいて、実態に即した具体的支援及び環境調整をする。

(4) 評価

- ア 再度各種検査を行い支援に対する評価を行う。
- イ クラスの中での様子について聞く。

(5) 成果と課題をまとめる。

3 実態把握

(1) 保護者から家庭の様子を聞く。

本人の状況で、家庭においては進んで手伝いをしている。また遊びはプラレールなど電車関係が中心である。また一人で絵を描いていると決まって電車であることが多い。兄妹仲はよく、あまりけんかはしない。家ではよくしゃべるが、外出すると表情が硬くなりことばが出てこない。ただ親戚のうちやよく遊ぶ決まった友達の家では、話すことに抵抗はない。会話の内容は一方的だったり、または会話が続かなかったりすることが多いようだ。

(2) 学級での実態

〈学習面〉

計算問題・漢字練習などパターン化した課題は、とても得意である。反面読み取りや文章題など抽象的なことばを使って考える課題は苦手である。また体育や音楽などでは、友達の動きに合わせて学習の流れに沿って参加することができる。

〈学習面〉

集団の中では、表情が硬くまた行動もぎこちない。親しい友達の何人かとは会話をする事ができる。給食中など、友達の発言に対してにこやかな態度で接することができる。

(3) ことばの教室での様子

ことばの教室に一歩入ると、大きな集団からのストレスもなくなり、表情も明るくなりたくさんの話を始める。非常に快活に話し、活動的な様子である。また漢字練習やかけ算九九の問題などは非常に得意で意欲的に行う。遊びも活発であるが、電車の絵やボーリングゲームなど決まったものが多く、遊びにあまり広がりが見られない。またことばを使って説明したり、作文をしたりすることが苦手である。個別指導の場面でも抽象的な言語を使った課題に取り組み始めると離席したり、トイレに行ったりすることが多い。

(4) 心理検査

- ・ 〈WISC-Ⅲ 下位検査評価点〉平成12年11月14日実施
- ・ 〈ITPA〉平成12年12月21日実施

《諸検査からの考察》

WISC-Ⅲの下位検査の「積み木」「記号」「迷路」など視覚的なパターン課題は得意であり、「算数」「理解」の得点が低いので長い言語的な課題には対応が困難である。また「組み合わせ」「配列」の課題に対してはどう対応していいか戸惑ってしまいがちであった。これらのことより、機械的もしくはパターンの課題が得意であり、言語理解及び知覚統合（今まで獲得した認知能力を組み合わせる新しい場面で上手くやることのできる能力）に問題がみられ

る。ITPAの結果、暦年齢に対して言語学習年齢が2才3ヶ月ほど下回っている。

以上の結果より、自分が言いたいことがあってうまく自分の気持ちを相手に話せなかったり、環境の変化にどう対応していいかわからなかったりすることが考えられる。そのため、集団の場面において緘黙のような状態を示すものと考えられる。

4 実態に応じた個別指導計画

〈例1〉〇〇小学校 年 氏名〇〇 〇〇

	学習面(聞く・話す・書く・計算する・推論する)	行動・生活面	各種検査結果
実態のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く ・話す ・読む ・書く ・計算する ・推論する 	〈家族関係〉 〈本人〉	WISC - III VIQ PIQ FIQ
長期目標			
短期目標			
《教育形態・内容・留意事項等》		〈変容〉 〈課題〉	

〈例2〉集団の場面において場面緘黙の状態を示す児童の長期的な目標並びに短期的な目標

長期的な目標 不安や緊張をとり、集団の場面にリラックスして適応できるようにする。	
通常学級における 短期的な目標	ことばの教室における 短期的な目標
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携に努める。 ・教室での状態像を正しく把握する。 ・不安や緊張の除去のための支援 ・子どもを受容し、自尊感情を育てることができるよう支援する。 ・ことばの教室担当との連携を密にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連携に努める。 ・一時間の見通しがもてるようにする。 ・課題を出すにあたって、情報をより多く提供できるよう提示方法を工夫する。 ・ことばの使い方についての学習は、楽しく学べるよう工夫する。

- ・教室へ出向き、集団の中での行動スキルについてのモデルを担当が示す。
- ・学級担任との連携を密にする。

5 ことばの教室における実践

ことばの教室において、個別指導計画に沿って以下のように支援を行っている。

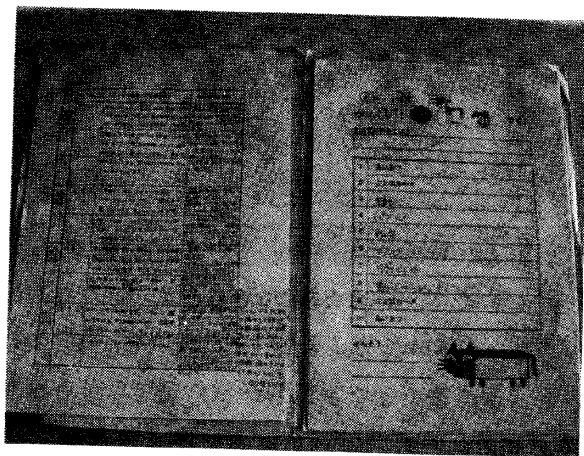
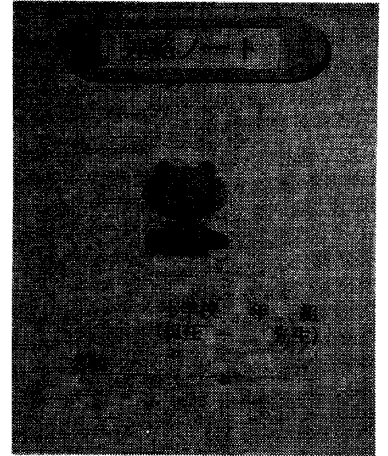
- (1) 連絡ノートを使用し、保護者との連絡をできるだけ多くとりあう。連絡ノートではことばの教室での児童の様子を知らせている。保護者からは家庭での児童の様子を知らせていただいている。また保護者からの要望や疑問にもこのノートを活用している。保護者との連絡については必要に応じて電話連絡も行っている。

〈例〉平成13年9月〇日の連絡ノートより

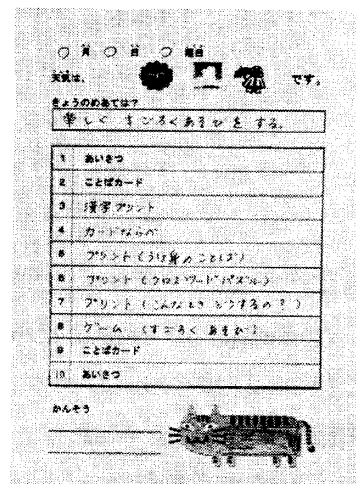
担当より：また元気な顔が見られてうれしいです。夏休みが終わってちょっぴりお兄ちゃんになったよ うながします。とっても充実した夏休みだったよう ですね。

保護者より：2学期もよろしくお願いします。夏休みに家族で海へ行きました。目的だった海水浴は台風のためできませんでした。しかし近くの水族館へ見学に行ったり、遊園地で遊んだりして楽しく過ごせました。とてもいい夏休みだったと思います。

- (2) ことばカードを使用し、ことばの教室での一時間の流れを明確にする。自分の活動に見通しをもたせることにより、学習に対する不安や緊張を和らげることをねらいとしている。



〈保護者との連絡及びことばカード〉

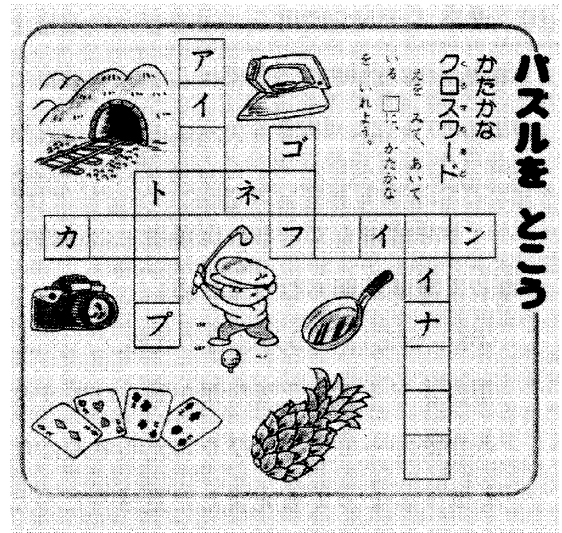


〈1時間の活動の見通しをもてるカード〉

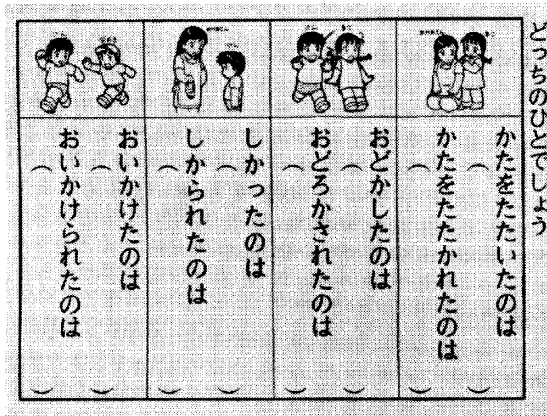
- (3) ことばを使った課題や物事や状況をことばで説明する課題には苦手意識をもっているので、クロスワードパズルやヒントがついたなぞなぞ、絵の補助がついたプリントを用意するよう工夫している。情報をより豊富にもてるように絵と文を併せて提示できるようにする。また迷っているような場合、無理をさせず分かりやすいことばかけも併せて行う。課題の中に児童の得意な計算や漢字練習を必ず取り入れ、称賛することで自信をもつことができるように支援する。



〈絵の補助がついたなぞなぞ〉



〈絵の補助がついたクロスワードパズル〉



〈絵の補助のついた練習プリント〉



〈えときつなぎことば〉

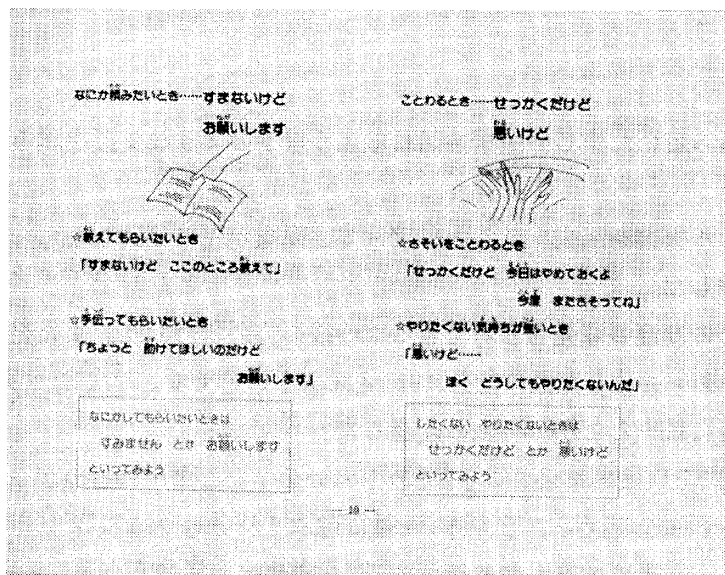
(4) 集団の中での行動スキル

集団の中での行動スキルについては、場面絵を活用したり、遊びの場面で意図的に学ぶことができたりするようにする。右記のプリントでは、場面絵に合ったことばを吹き出しに書く課題である。絵の人物や状況がわからず、吹き出しにことばを書くことができなかった。そのため、人物の表情の読み方や状況の解釈の仕方等について支援を行ってきた。その結果、場面絵

の状況に併せたことばが記入できるようになってきた。また引っ込み思案なため、これまで様々な場面でしりごみをし、集団の場で自然にできた経験が不足してしまったところがある。集団の中でどのように振る舞うか知らないために不安に陥ることになることが多いようである。集団場面でどのように振る舞うかモデルを示しながら、支援していく必要がある。そこで限定的なことばの教室の中だけの指導ではなく、学級へ出向き、緘黙の状態を示している場で学級担任と共に支援することも実施した。このような場合、ことばの教室の担当者が学級に入ることにより、緘黙の状態が強くなることもあるので十分注意して対応した。



〈画面絵〉



〈絵本を使っでの社会技能の練習〉

6 通常学級における実践

教室において緘黙の状態を示す児童に対する支援は、“緘黙を起こしている場”で進めることが何より大切であると思われる。学級担任とことばの教室の担当が連携し適切な支援をすれば、より効果を上げることができると思われる。問題は、いかにことばの教室で達成した家庭的な安心感や自信を、教室につなげてやるかである。その点を踏まえて、通常学級における実践を行った。

(1) 教室において、その子どもとかわる中心的大人としての教師のかかわり

- ・教師が教室において緘黙の状態を示す児童に対して、一種の安全地帯としての役割を果たすことが必要であると思われる。そのためには教室において緘黙の状態を示す児童に対して、心の交流を図り信頼させることに努めた。また座席の位置やグループ構成など教室において

緘黙の状態を示す児童を取り巻く子どもの在り方については、教師の指導の下で調整するように心がけた。

- ・その子を取り巻く子どもの接し方はあくまでも教師の指導の下で調整するようにした。
- ・教室においてその子どもとかかわる大人としての教師のかかわりとして、担任だけでなく、T.T.の担当および必要に応じてことばの教室担当が教室に入り、教室において緘黙の状態を示す児童とその児童を取り巻く周囲の子どもの支援にあたる。

(2) 不安を感じる状況の把握

教室内においてどのようなときに困っていたり、表情が硬くなっているのかについて観察し、その児童の状況を正しく把握する。観察の結果は、以下のものである。

- ・一日の予定が急に変更になり、一日のスケジュールがよく分からなくなったとき
- ・友達の前で発表するとき
- ・作文や日記を書くとき
- ・自分の意見を求められたとき
- ・新しい友達とグループを組んだとき

以上の五点を参考に、教室において緘黙の状態を示す児童に対する不安の除去についての具体策を考えた。

(3) 不安の除去

教室内でできるだけ、子どもが落ち着いた楽しい生活を送れるよう以下のような支援を試みた。

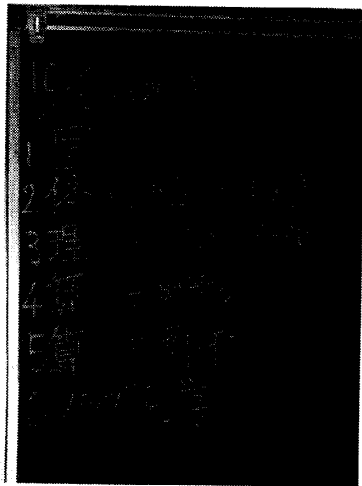
- ・一日の見通しをつけることのできる板書を工夫することによって、児童が先の見通しをもって安心して生活できるように配慮した。
- ・発表の順番は、一番初めにせず前の友達の意見も参考できるよう後の方の番にした。また発表の仕方何をも話したらいいかパターン化した話の仕方（例「初めは、〇〇です。」「次に、〇〇です。」「終わりに〇〇です。」）に統一して話せるよう配慮した。
- ・質問の仕方の仕方についても、漠然と「どうするの?」「どうしたいの?」と聞かれるのが一番困るようなので、〇か×かもしくは二者択一の形（例「一緒に遊ぶそれともやめる?」「ドッジボールにする、それとも鬼ごっこにする?」）で質問するように配慮している。
- ・作文を書くときには何を書いていいのか大変困っている様子なので、教師の方から具体的なヒント（メモ）カードを渡し、カードを参考に作文が書けるよう配慮している。
- ・聴覚と視覚を含めた情報をもつ指示を出すよう心がけている。

（例：漢字テスト5問の場合、読みを言うだけでなく、板書も添える。）

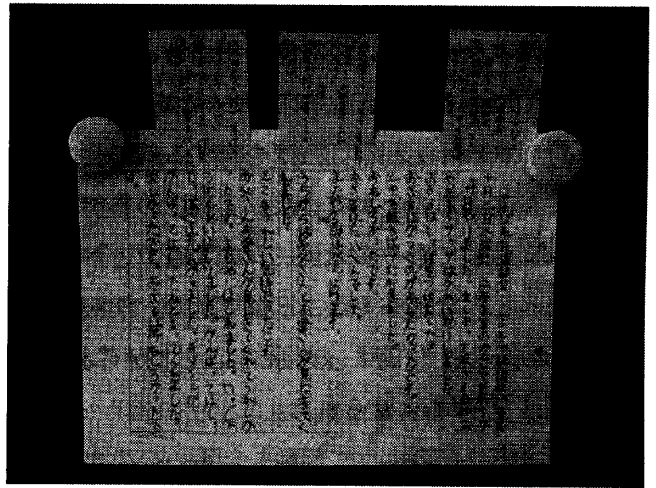
- ・座席やグループ作りの際、仲良しの友達と組み合わせることにより、心の安定が図れるよう配慮している。

(4) 強化の方法（褒め方）

少しの変化に対しても認め、褒めるよう心がけた。また褒め方については、その子どもにとってみんなの前で褒めた方がいいのか、個別に褒めた方がいいのか実態に合わせて工夫した。子どもを褒めることによって子どもに自信をもたせるよう努めた。



〈一日の見通しを示す板書〉



〈作文を書くときのヒントカード〉

7 評 価

(1) 再検査の結果

・ 〈WISC - III〉平成13年11月12日実施

〈再検査の結果についての考察〉

言語性検査については、一回目の検査に比べると「類似」や「単語」や「理解」など言語能力に高い得点が得られている。その理由として、知能検査の結果は本来、恒常的なものといわれているが、本児は緘黙という状態であり、一回目の検査結果は本人の状態を正しく反映していなかったことやことばの教室において言語能力に関する指導を行ったことも関与していると思われる。しかし動作性検査において、ほぼ一回目と同じ結果となっている。視知覚の能力を高める指導、また時系列の流れに沿って考える練習、聴覚的短期記憶を強化するなどの計画的な指導が今後必要だと思われる。

(2) 学級での様子の変容

- ・ 表情が明るくなり、同じクラスの友達とふざけていたり、昼休みに遊んだりしている様子をよくみかけるようになった。
- ・ 学習の流れの中で、他の友達に合わせて行動できるようになったため目立たなくなってきた。
- ・ 学習の中で、「はい。」「いいえ。」などの意思表示を挙手するなどの行動で示すことができるようになってきた。
- ・ また短いことばのやりとりであれば、児童会縦割り班の担当教師とも話せるようになってきた。

8 成果と課題

以上のようにことばの教室の担当者と通常学級担任が連携し支援の工夫を行ってきた。その結果、集団場面では、かなりリラックスした状態で適応できるようになってきたように思われる。先日行われた「足利市ことばを育てる親の会主催」のレクレーション大会では、終始にこやかな表情で参加することができた。父親との参加であったが、他のお母さん方とも一緒になって活動の流れにのって楽しんでゲームをすることができた。また集団場面にもかかわらず、ことばの教室の担当と内緒話をすることができた。学級の他の児童から本児の様子について、「〇〇ちゃん、この頃ガチガチに固まった氷のアイスから、バニラのアイスクリームくらいに柔らかくなったね。」という声もよせられた。

集団の中でどのように行動したらいいのか、何を言ったらいいのかなどについて、個別に指導したり、また通常学級という大集団の中で同じ歩調で教えていったりすることで不安の軽減につながったものと思われる。一方保護者の協力が得られ、ストレスのない家庭においても意図的計画的な経験をする機会を作ってくださったことも不安の軽減につながっていると思われる。このように集団において緘黙の状態を示す児童の支援を行うことは、通常学級の教室において、視覚的聴覚的課題の与え方・一日の見通しがもてる板書の工夫・パターン化した発表の仕方の工夫など、学級経営の基本的な段階で他の一般の児童が学習する上でも大変役立つものであった。

今後の課題としては、周囲が必要な場면을意図的につくり、それを積極的に支援することにより「できた。」「やれた。」という経験を増やせるよう支援していきたい。このような成功経験の積み重ねの結果、自信が育つよう支援を続けていきたい。また個別指導の場面において、認知面の偏りについてのより細やかな支援をする必要がある。そしてことばの教室においても授業公開の機会を作り、他の教師に集団場面において緘黙の状態を示す児童に対する対応の仕方について理解を得る必要がある。今後もことばの教室担当と学級担任との連携をより密にし、児童のためのよりよい支援の工夫について考えていきたい。

《参考文献》

- ・場面緘黙児の心理と指導 河井芳文 河井英子共著 田研出版株式会社
- ・場面緘黙児の指導 栃木県総合教育センター
- ・ステップアップシリーズ「ことばの使い方」 こばと治療教育センター
- ・頭脳開発「ことば・文・トレーニング」 株式会社学習研究所
- ・ディズニー知育遊び「ミッキーのクイズがいっぱい」 株式会社学習研究所
- ・きみならどうする (LD児のためのソーシャルスキル) 上野一彦著 日本文化科学者

評

平成14年度から実施される学習指導要領総則に「障害のある児童生徒などについては、児童生徒の実態に応じ、指導内容や指導方法を工夫すること。特に、特殊学級又は通級による指導については、教師間の連携に努め、効果的な指導を行うこと」が明記されました。

また、平成13年1月には「21世紀の特殊教育の在り方について」の報告が出されました。そこでは「これからの特殊教育は、障害のある児童生徒等の視点に立って一人一人のニーズを把握し、必要な支援を行うという考えに基づいて対応を図る必要がある」という基本的な考え方が示されました。

このような中、本研究は、通常の学級の特別な教育的支援を必要とする児童への支援について、通常の学級と言語通級指導教室との連携を通して実践研究したものです。

この研究では、まず児童の実態を丁寧に把握しています。保護者、学級担任、ことばの教室担当者との話し合いや心理検査を通して児童の状態を的確に把握しようと努めています。

次に、捉えた実態から短期、長期の目標を設定し、必要な支援内容を吟味した個別指導計画を作成しています。ここでは、通常の学級とことばの教室双方での目標を設定し、児童にどのような支援をしていくかを明確にしています。

その結果、ことばの教室と通常の学級での具体的な実践が相互に作用しあい、児童が安心して集団生活の中で活動できるようになるとともに、言語能力の面での成長も見られ、学習への適応状況も変化してきています。

特別な教育的支援が必要な児童への支援には、教職員の理解と協力が必要ですが、特に通級による指導を受けている児童の学級担任が、通級指導担当教員と連絡を密にし、児童の実態に配慮した指導を行うことが児童にとって効果的な支援につながることを本研究は示しています。現在ことばの教室に通う児童のいる学校にも大いに参考になるものと考えます。

今後とも、通級による指導を受けている児童の思いや、保護者の願いを大切にして、学校や学級内の人間関係づくりに努め、教職員の連携を密にした支援方法についてさらに研究を深めていくことを期待します。